

機関番号：31307

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20530473

研究課題名（和文） 漆器産業の高度化と産業社会の新たな再編との対応関係に関する実証的比較研究

研究課題名（英文） Empirical comparative study of the relation between the advancement of lacquerware industry and the development of local economy

研究代表者

高橋 英博（TAKAHASHI HIDEHIRO）

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：80206838

研究成果の概要（和文）：

1990年代から、多くの漆器産地では、これまでの生産の体系が変わりつつある。まずは、問屋の力が弱くなってきている。そして、問屋は職人たちをその配下に抱えられなくなっている。そのかわり、それぞれの分業工程を担ってきた職人たちが自立してきている。むしろ、自立を迫られるようになってきている。そこでは、生産のありかたがあたりしくなりつつあるし、また、流通や販売のありかたもあたりしくなりつつある。

研究成果の概要（英文）：

Since the 1990s, in producing lacquerware, many producers are changing the system so far. The power which wholesalers have had is getting weaker and weaker. Therefore, many wholesalers are unable to employ their craftsmen. Instead, the craftsmen who had been dominated by wholesale are starting new type of business independently.

In such a situation today, the new way of production in traditional lacquerware and also the way of marketing has been spreading.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：漆器 産地 問屋 職人 個別化 競争 新しい生産体制

1. 研究開始当初の背景

(1) とくに 1990年代から、戦後から続いてきた人々の生活様式や生活文化のありかたの変化に加えて、経済のグローバル化の進行にともなう漆器の輸出の落ち込みや安価な製品の大量輸入などによって、日本国内の漆器の生産や販売の低迷が続いている。

(2) 漆器の生産や販売の落ち込みによって、

伝統的工芸品をはじめとする日本の伝統的な産業・技術はもちろん、伝統的な文化とその継承が危ぶまれるようになってきている。

(3) 漆器の主要な産地において、事業所数や就業者数、そして製造品出荷額が急速に落ち込んで、地域経済にこれまでにない深刻な影響を与えている。

(4) こうした厳しい状況のなかにあつて、漆器の生産や販売体制の高度化(製品のコンセプト・製品企画・用途・デザイン・流通や販路の開拓・富裕層をはじめとする新しい顧客層の開拓、ヨーロッパを主とする世界市場の開拓)などが強く要請されるようになっていゝる。さらに、これまで主流だった問屋を中心とする伝統的な漆器生産のありかたが相対的に退いてきている。それに代わつて、力のある個々の職人たちが自立するとともに、彼らによる新しい生産・流通・販売のありかたが広がりつつある。

(5) 上にみてきた背景や動きとともに、これまでの漆器産地の体制が大きく再編されつつある。むしろ、こうした再編を抜きにしては、これからの漆器の生産も考えにくいようになりつつある。

2. 研究の目的

(1) 伝統的な漆器生産の衰退の中身を具体的に明らかにする。

(2) 産地におけるさまざまな新しい生産・流通・販売の試みの中身とその特徴について具体的に明らかにする。

(3) 個々の職人たちの自立とその背景や中身、そして彼らが抱えるさまざまな課題について具体的に明らかにする。

(4) 漆器産地におけるこれまでの生産体制全体の再編の中身とこれからの方向、そしてそこに見られる課題について具体的に明らかにする。

(5) とくに地方圏における経済的な自立に果たす地場産業のありかたについて提案する。

3. 研究の方法

(1) 関連する文献を収集整理しその論点の変遷の中に本研究を学説的に位置づけるとともに、それをふまえて、順次必要な現地調査を実施する。

(2) 現地調査は、行政や関連団体などのほか、産地の新しい動きを体現している事業所、また、同様の職人を対象とした資料収集とヒアリング調査を中心とする。

(3) 対象事例は、新潟漆器(新潟市)、村上木彫堆朱(新潟県村上市)、津軽塗(青森県弘前市)、浄法寺塗(岩手県二戸市)、川連漆器(秋田県湯沢市)、会津塗(福島県会津若松市)の6事例とする。

(4) 東北の6事例を少しでも相対化して理解するために、石川県の輪島塗と金沢漆器、福井県の山中漆器と越前漆器などについても実地調査を行う。

(5) このような漆器産地を対象とする具体的な事例調査をもとにして、地方都市におけ

る経済の内発的な活性化に占める地場産業の可能性を積極的に拾い取る。

4. 研究成果

(1) 全体の傾向として、漆器産業を取り巻く長い不況のなかで、産地が生き延びるため、生産する主力製品をある特定の商品傾向に限るといふ戦略をとる産地が増えてきつつある——製品の種類そのもののほか、富裕層か大衆かなどといったような顧客層の限定など——。そうした限定戦略の範囲なかで、それぞれの製品を高度化させ差別化させようと試みている。

(2) しかし、どの漆器産地においても、全体として、漆器産業の高度化への取り組みにもかかわらず、現実には産地社会がますます衰退している。さらには、後継者の養成をはじめとして、その衰退を解消していく担い手の形成がなかなかうまくいっていない。

(3) 漆器産業そのものと漆器産地の弱体化という状況のなかで、それぞれの産地における産地社会の変化もまちまちである。

① 津軽では、産地における各職人のいわば独立と職人間のネットワーク作りが顕著である。それが、個性的な漆器の開発という形となって現れてもいる。

② 一部ではあるが、似たような動きが、川連や会津にもみてとれる。とくに会津では、特定の事業所が産地をはるかに越えた事業展開を成功させているケースも出ている。しかし、その会津や川連では、そうした職人の独立とネットワークはまだ限られた動きでしかない。

③ 輪島や村上(木彫堆朱)や飛騨(春慶塗)では、職人が独立した事業展開を行っているケースはほとんどなく、従来からのいわば産地体制がかなり強く続いている。それは、産地体制が強い分だけ職人の独立とネットワークを難しくしているとも言える。

④ 金沢では、むしろ事業所(問屋)そのものが産地を越えた広域ネットワークを構成するなかで生き残りを図っているケースがみられ、「産地」そのものが産地外のネットワークを構成することで成り立っている面がある。

⑤ 能代(春慶塗)では「産地」がほとんど消えかかっているところまで来ている。逆に、新潟では、いったん消えかかった産地を復活させることに成功し、小規模ではあるが、後継者育成も含めた職人層の育成が進みつつある。

(4) 総じて、産地社会の従来からの生産分業体制が固く生き続けているところでは、個々の職人層間の競争がまだまだ弱いままに置かれていること、逆に、産地の生産分業体制が弱くなっているところでは、職人層の生存

競争が激化しながら、多様な製品開発が急速に進んでいる。

(5) それを個々に見ていくと、小さな漆器産地では、自立的な経営志向を強くする漆器職人が新しいコンセプトによる漆器製品を企画開発するとともに、その販路の開拓や顧客の獲得の手法についても、消費者と直結した回路を形成しようとする試みが広がっている。そして、それが産地の大きな動きになりつつある。東北では、津軽塗に目立ってみられる傾向であるが、もっと小さな産地である秀衡塗や鳴子漆器では、こうした自立した職人そのものが漆器産地もしくは漆器業全体を支えていると言っても言い過ぎではない。逆の言い方をすれば、こうした自立志向の職人層がいなかったり、現れてきにくかったりする産地においては、漆器産地や漆器業そのものがその伝統技能や伝統的文化もとも存続が危ぶまれてくるということに他ならない。たとえば秋田県で江戸期から続いてきた能代春慶塗は、それが一子相伝によって継承されてきた固有の歴史を持っていることも手伝って、そうした産地と伝統工芸そのものの存続が危ぶまれている。

(6) しかし、自立志向の職人が活躍しているような産地のケースにあっても、経営を上向かせて産地を維持発展させていくためには、さまざまな壁が立ちはだかっている。小さな漆器産地では、自立志向の職人が消費者の今日的なニーズを素早く掴みとって市場の動向をつかみやすいとともに、それをその個性的な感性でもって商品に反映しやすい環境にあるといえる。しかし、個々の顧客の細かなオーダーに柔軟にこたえることができる半面、その作品が当の職人にしかできないようなオリジナルなものになってきて、大量の受注が生じたときにそれにこたえきれないという難点も生じてくる。つまり、産地内もしくはその近辺に数人の漆器職人がいて、忙しくなったときに彼らに仕事を頼めるような環境にあるときさえ、その作品がオリジナルな分だけ、その仕事に十分にこたえることのできる職人が少なくなるということにもなるのである。そのほか、創意工夫と異業種をも含めた他産地の職人たちとのネットワークを形成してそれを自分の新しい漆器製品の開発と販路の拡大へとつなげることができる職人であっても、彼らは、抱えている従業員がいなかったり、いたとしてもごくわずかであるために経営の小回りが利くという利点はあったりするものの、やはり大量受注に対応できないことや在庫を抱えておくリスクが取れないことなど、経営を伸ばして安定させるためには難点も多い。また、販路の拡大と新しい顧客の獲得のためのツールとしてのさまざまな展示

会への出展にしても、大都市での展示会開催を続けるためのコストも小さくない。さらには、展示会への出展作品にしても、話題性を提供するとなるといつも同じような作品だけを出品するというわけにもいかず、つねに新しい作品を制作しないといけない状況に身を置かざるを得ない。クラフト作家として漆器業を営み続ける道を選ぶにしても、その道筋はなかなか容易ではない。

(7) いずれにも共通して、漆器の工程間分業の体系にもとづいたかつての「産地体制」が急速に後退している。そのかわり、漆器産業の長い低迷にもなつて産地内の問屋や製造小売業の力が衰えてきたために、各々の職人たちが独立したり独立せざるをえないようになっていたりしている。そして、その自立した職人たちが産地の内外の似たような職人たちと互いにネットワークを形成しつつ、これまでとは異なったコンセプトをもつ多様で斬新な作品を作成したり、それを市場に乗せるための新しい販路を開拓したりするようになっていく。

(8) そのなかで、これまで産地体制の末端を担ってきた職人層たちが、そこから脱してクラフト作家的な地位をめざす動きも大きくなりつつある。その動きは、大きな産地のなかでも見てとれるとはいえ、小さな産地でとりわけ顕著にみられる動きとなっている。

(9) こうして今日、日本の漆器産地はこれまでにないような再編のさなかにあるが、それは「地方圏」の自立の一方途である「郷土産業社会」をどう作っていくかというテーマを内包した動きでもある。

(10) 全国の地場産業の地において、漆や漆器を超えて、もっと広く「郷土産業社会」の再編や創生への共通認識やその実現に向けた営みが始まっているといえそうなのかな事例もある。しかし、そのなかにおいてさえ、どのような「郷土資源」をどのように組み合わせしていくのか、その具体的な事業化や活動についてはこれからである。しかし、地方圏の「郷土資源」を活用・アピールした総体としての「郷土産業社会」の意図的な再編や創生への共通認識やその実現に向けた試みとしては、これからの動きを注目してよいかもしれない。そのとき、「地方圏」一般ではなくて日本の個々の地方圏の「場所の個性」（「郷土」）に根ざした自立モデルの展開がはじまるのではないだろうか。「郷土産業社会」の創生に向けて、「郷土」という現実と概念がもっている可能性にもっと目を向けてよいかもしれない。

(11) 以上の成果について、2010年度の東北社会学会と東北都市学会の二つの学会で報告したとともに、それを踏まえて、『漆器産業の高度化と産地社会の新たな再編との対応関係に関する実証的比較研究』(A 4版・81頁)という報告書を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 2件)

- ① 高橋英博、漆器産地の動向と課題 —— 「郷土産業社会」への道筋——、東北都市学会報告、2010年9月25-26日(弘前大学)
- ② 高橋英博、「郷土」の創生とその可能性 —— 漆器産地の調査をふまえて——、東北社会学会報告、2010年7月24-25日(新潟大学)

〔図書〕(計 1件)

- ① 高橋英博、『漆器産業の高度化と産地社会の新たな再編との対応関係に関する実証的比較研究』(科研費報告書)、2010、81

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 英博 (TAKAHASHI HIDEHIRO)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：80206838